

〈論文〉

1970 年代における男性同性愛者の旅行

齊 藤 巧 弥

札幌国際大学観光学部観光ビジネス学科

Japanese Gay Men's Travel in the 1970s

Takuya Saito (Department of Tourism Business, Faculty of Tourism, Sapporo International University)

This paper aims to depict the travel patterns of gay men in Japan during the 1970s. The analysis will focus on what kind of destinations were chosen, how these destinations were perceived, and how masculinity affected their travel. In a gay magazine *Barazoku*, which is the subject of this analysis, readers have been encouraging other readers to travel since its first issue by providing information about gay bars and bathhouses in various regions and by holding gatherings. The editors of *Barazoku* also organized trips and provided the readers with places to meet other gay men. *Barazoku* associated the destination places of the trips with seriousness, cleanliness, and elitism. Manila was a popular destination for outbound travel, which followed the heterosexual male sex tourism of the time. In both trips, it can be said that they were seeking encounters with other gay men, temporary liberation, and fulfillment of their sexual desires, many of which were made possible by their socio-cultural situation as men.

キーワード : LGBTQ ツーリズム 移動 安全な旅 セックス・ツーリズム 薔薇族
Keywords : LGBTQ tourism mobility safe travel sex tourism *Barazoku*

1. はじめに

本稿では、男性同性愛者向けの雑誌『薔薇族』を手がかりとして、日本における 1970 年代の男性同性愛者の旅行について記述する。

昨今の日本では「LGBTQ ツーリズム」¹⁾という名のもと、LGBTQ をはじめとした性的マイノリティをターゲットとする観光事業が登場し始めている。比較的早い段階の取り組みとして、2014 年には沖縄の「ホテルパームロイヤル NAHA」がホテル・旅館として全国初の LGBT フレンドリー宣言をおこなっている(真崎 2020)。2017 年には、国連世界観光機関が LGBTQ ツーリズムに関するレポートの第二弾である『Second Global Report on LGBT Tourism』(UNWTO 2017)を発行し、JTB 総合研究所(2018)は「2018 年は日本での LGBT ツーリズム元年となるか?」という記事を公開した。同年 2018 年、復興庁は東北への外国人観光客を誘致する「新しい東北」交流拡大モデル事業の一つとして、「目指せ!ダイバーシティ東北」を採択した。その事業内容は「多大な経済効果が見込めると言われている『LGBT ツーリズム』市場の取込のため、LGBT が安心して旅行できる環境整備等により、『LGBT フレンドリーな東北』を確立する」(復興庁 2018)とされており、経済効果の高い新たなマーケットとしての LGBTQ に国としての関心が生じている。他にも大阪観光局は 2018 年 10 月、LGBTQ ツーリズムの国際ネットワークである国際

LGBTQ+ 旅行協会(IGLTA)に加盟をし、2019 年には LGBTQ をターゲットに大阪の魅力を発信するウェブサイト「VISIT GAY OSAKA」を立ち上げている。

このような LGBTQ ツーリズムへの関心の高まりは、LGBTQ という人々が一つの層・一つの市場として見出されたことを意味し、同時にこれまで不可視化される傾向のあったその社会的存在を認識させるきっかけとなったという一側面もある。だがそれは、LGBTQ による旅行がこれまでおこなわれてこなかったことを意味しない。では LGBTQ の人々はこれまでどのような旅行をしてきたのであろうか。

2. 先行研究

「LGBTQ ツーリズム」の定義はさまざまである。JTB 総合研究所(2023)は、「[LGBTQ]それぞれの人同士の旅行のこと」ともっとも広義の定義を与えている。ヴォロブジョヴァス-ピントは「[LGBTQ の]人々に向けた観光製品・サービスの開発・マーケティングのこと」(Vorobjovas-Pinta 2021: 1)とし、観光事業という側面から定義をしている。そしてオイは、「同性愛者が他者と社会的または親密に旅行をしたり交流をしたりできる安心安全な環境を提供したり、彼ら・彼女らが自由になることができ、自分らしくあることのできる観光形態のこと」(Ooi 2021: 24)と、マイノリティにとっての安全性という点から説明する。つまり LGBTQ ツーリズムが指し示す側面とは、LGBTQ (同士)の旅行形態、観光事

業、観光時の安全性という3点としてまとめることができるだろう。

ただ一方で、ヴォロブジョヴァス-ピンタ (Vorobjovas-Pinta 2021: 2) は先行研究を検討し、それらが扱ってきたLGBTQ ツーリズムの特徴を、(1)アイデンティティの表現と探究、(2)コミュニティと同胞感覚、(3)自身の性に忠実な表現・行動とまとめている。つまり先行研究では、LGBTQ にとっての観光の役割に重きを置いてきたと言えるのであり、これらに共通するのは、異性愛規範といった抑圧的な日常生活からの解放や観光中に差別を受けないという安全性への注目である (Shahani 2020; Usai & Wassler 2022; Vorobjovas-Pinta 2021)。

たとえばマークウェルは、ゲイやレズビアンにとっての余暇の役割を、主にアイデンティティの形成や日常の抑圧的環境からの一時的な自由であると説明する (Markwell 1998)。また、ハウはサンフランシスコを事例にし、観光ガイドブックなどの記述や旅行者へのインタビューを通して、その地がクィアな人々にとっての「ホームランド」として構築されていることを論じている (Howe 2001)。つまり、「クィアな観光客は、自身を受け入れてくれる『ホームランド』に行くために、性的アイデンティティによって受け入れられることのない『ホーム』を後にするのだ」(同上: 37)。

では日本において「LGBTQ フレンドリー」として有名な場所はどこかという点、「ゲイタウン」とも呼ばれてきた新宿二丁目をあげることができる。須崎は、「多くのゲイ男性にとって新宿二丁目はゲイ・アイデンティティと強く結びつけられた場所であり、(…)ゲイ・アイデンティティを表現・解放できる場所として語られ、その同質性ゆえに安心という感情が生み出される」(2019: 83) と論じている。

ただ注意しなければいけないのは、サンフランシスコや新宿二丁目のような、アイデンティティの解放という点で有名な都市部のみが旅行の目的地となるわけではないということである。たとえば、地方における性的マイノリティを調査した杉浦・前川 (2022) においては、カミングアウトをするか否かなどの判断に影響を与える地理的要因を、解放的とされる「都市部」と保守的とされる「地方」という軸からよりも、家族や知人がいる「地元」とそうではないそれ以外の地域という軸から考えることの重要性が示されている。すでに現代においても、LGBTQ をターゲットとしたイベントは新宿二丁目などの有名な地域のみで開催されているわけではない。たとえば、ゲイ男性をターゲットに実施されてきた「大人の修学旅行」というイベントは、当事者の交流や友達・恋人作りなどを目的に、2018年から台湾、沖縄、秩父などで開催され (KATHY'S, n.d.)、また「裏磐梯レインボー・スキー・ウィークエンド」というイベントでは、震災後の東北復興を目的に、福島県の裏磐梯においてスキーツ

アーが企画されてきた (Out Asia Trave, n.d.)。このように昨今においても目的地や開催目的が多様である事実を鑑みるのであれば、どのような場所が目的地として選択されてきたのか、あるいはその目的地自体がどのような場所として形成されてきたのかという点に着目することが求められる。日本に住むLGBTQの観光行動という点においては研究が存在しておらず、主にインバウンドにとって日本が同性婚ディスティネーションとなる可能性について論じた中嶋 (2022) が存在するのみである。

加えて、昨今のクィアスタディーズにおいてはインターセクショナリティへの注目が重要視されており、LGBTQ ツーリズムについても同様の指摘がされている (Puar 2002)。たとえばマークウェルは、「理想化された『同性愛者の旅行者』がマーケティングにおいて描かれるとき、それは未だに白人で、男性で、健常者で、引き締まった体つきで、60歳以下の人物であるようだ」(Markwell 2021: xv) と、そのバイアスを指摘している。

以上からは、私たちがLGBTQ ツーリズムを論じる際に注目すべきは、それが彼ら・彼女らにとって解放となるということはある程度の前提としつつ、そうした解放が具体的にどのような形を取ってきたのか、誰にとっての解放だったのか、それがどのような社会的・文化的条件によって可能となってきたのか、ということだ。今回は男性同性愛者に焦点を当て、彼らの旅行において男性としての社会的地位が持っていた影響を視野に入れつつ分析を進める。

3. 研究の目的

本稿の基礎的な目的は、日本における男性同性愛者の旅行形態を歴史的に記述するという点である。その上で、次の問いを設定する。一つは、日本の男性同性愛者の旅行において、いかなる場所が旅行の目的地とされ、その場はどのような場 (形態や意味づけ) として形作られていたのかという問いである。二つ目は、彼らの旅行が男性という社会的地位とどう関わっていたのかという問いである。

補足的に、本稿が使う旅行や観光という言葉について触れておきたい。観光とは何かという問いに関しては無数の議論がされてきたが、その定義は、近代の大衆観光の特徴について理解したいのか、それとも普遍的な「観光的なもの」を明らかにしたいのかによって変わる (橋本 2019)。大衆観光を、「1960年代の日米欧諸国に観光客が『爆発的』に出現した歴史的現象」(安村 2011: 21) と捉え、余暇と労働の関係をその特徴として分析をするか、あるいはより普遍的な概念として、観光に見られる「社会的なもの」の特徴を「モビリティ」として捉え分析をするか (遠藤 2017) などによって、分析の焦点が変わりうる。本稿では、広くは地元を離れるという移

動、狭くはその一つの形態としての旅行に焦点を当てるため、旅行、旅、出張、観光、移動といった概念を緩やかな連続体として捉えて分析をしていく。

4. 分析資料

男性同性愛者の旅行の歴史を論じる資料として、1971年に創刊された日本における初の男性同性愛者向け商業誌である『薔薇族』を扱う（以下、鉤括弧なしで表記）²⁾。薔薇族は異性愛者である伊藤文学によって創刊され、2023年4月号をもって廃刊となるまで発行されてきた。薔薇族を扱う理由は、男性同性愛の歴史を論じるにあたっては資料として最も豊富な記述が残されているからであり、1970年代という時代を扱う理由は、薔薇族を資料とするにあたって遡ることができるのが1970年代までだからである。一般的な雑誌同様、内容は編者による特集記事、ニュース、読者投稿、文通欄、小説、漫画、グラビアなどによって構成されている。本稿では1970年代に発行された号を主な対象とし、雑誌内に見られる旅行関連の記事や読者からの投稿などを分析する³⁾。また薔薇族という特定のメディアを扱うため、その分析結果は必然的に薔薇族に特有の状況となる可能性、またその雑誌の思想と切り離すことは困難であることを前提としたい。

5. 観光情報としてのゲイバー・ハッテン場

薔薇族は一般雑誌の取次ルートに乗って全国の書店へと配本されていたが（伊藤 2001）、薔薇族と旅行について考えるにあたって、まず人々がどのように雑誌を手に入れたのかを見てみたい。

薔薇族の購入経験については多くの語りが残されているが、その多くは、購入する姿を誰かに見られることへの恐怖と言える。またこれまでの研究においては、そもそも雑誌文化やそれを購入するこのできる経済的余裕自体が男性ジェンダーに特有のものであることが指摘されているが（前川 2017：218）、雑誌購入を可能とする条件として重要なのが、移動の能力であった。雑誌内の読者投稿では、薔薇族を入手するための移動経験が語られる。

私のような田舎に住む者にとっては、この本だけが慰みになっているようです。このただ一つの楽しささえ、思うように手に入れることができず、私のような田舎者は、悩みながらうもれてしまうような気がしてなりません。私の住む町には本書は売っておらず、隣の市にもないので、車で1時間以上もかかって買いに行くありさまです。かといって直接取り寄せるわけにもいきません。（1978.8: 133）

同様の語りとして、たとえば兵庫県に住んでいる人による読者投稿では、「ふと立ち寄った小さな書店のレジのかたわらにこの本〔薔薇族〕を見つけた」が、その「小さな書店で次号は買わない。それは店の人が私のことを知るから」であり、かわりに「新幹線に乗って東京に出て雑誌を手に入れる」（1971.11: 14-15）と語られる。このように、まず情報を入手するという段階において移動するという行動が重大な役割を果たしていたのであり、それは旅行を可能とする前提となる。

薔薇族において掲載された情報のうち「観光情報」と捉えることのできる初めてのものは、1972年7月号の「特集 祭り」であり、東北から九州までの裸祭り11の「全国お祭りガイド」が掲載されている。その後、同性愛者が集まる場所としてゲイバーやハッテン場⁴⁾についての情報が掲載されてきた。1972年9月号には編集人の一人が、東京内のとあるハッテン場についての記事を載せている。しかしここで注目したいのは、その内容よりも、文末に置かれている次の文章である。

さて、きみの地方の愛の場所はどんな場所ですか。全国の読者に詳しく教えてあげてください。旅行した折にでも安心して出かけられるように、アドバイスを含めて。（1972.9: 27）

もちろんゲイバーやハッテン場の情報は、その地元の人が利用できるようにという意図があったことは想像に難くないが、旅行で訪れるための場所として積極的に読者からの情報が募集されていた。

ゲイバーやハッテン場を紹介する読者からの情報提供は1975年5月号からは「タウン・レポート 全国男町十三番地」という記事として独立していった。その中にも、「とにかく、旅行者でも安心できる所だと思い、紹介しました」と言われる熊本のゲイバー（1975.5: 58）、「全国の皆さん、東北旅行の時、また出張で来られる時、足を運んでみてはいかがでしょう。きっと誰かに逢えると思います」と紹介される八戸のハッテン場（1975.9: 76）など、旅行者を見込んだ投稿、旅行者に配慮するような投稿が多く見られる。

このように旅行者を見込んだ投稿がされるには、雑誌の購入経験と同様に、そもそもその移動が可能な社会的条件が揃っていることが前提となる。たとえば、1975年9月号の記事では、新幹線開通に触れ、各地からの旅行者を呼び込もうとしている。

平和を象徴とする中国地方の中核都市広島。（…）山陽新幹線が博多まで開通して、関東や関西からも近くなり、気軽に来てもらえるようになった。（…）スタンド、屋台、映画館、サウナ、そして公園と、数こそ少ないがバラエティーに富んでいて、旅のア

バンチュールを楽しんでもらえると思う。(1975.9: 76)

以上のように、まず人々が自由に移動をすることができるためには、移動のテクノロジーが発達していなければならない。その上で男性同性愛者はそれを活用しつつ、全国各地のゲイバーやハッテン場を旅行の目的地として共有し合っていた。これらの旅行に関する言説からは、都会ではなく、地元を離れた場における解放、そしてそうした場が各地に存在することを共有する読者らの関係性が見えてくる。

6. 企画される読者の集い・旅行

地方に住む読者の中には、自ら読者の集いを開催するものもいた。その一例が、青森にあった「竹の子会」である。この会の詳細は不明だが、1976年に十周年記念パーティが開催されていることから、薔薇族が創刊される前の1966年ごろにはすでに結成されていたものと思われる。「竹の子会」が薔薇族において初めて登場したと思われる1975年9月号では、読者懇親会の開催について次のように告知がされている。

東京や大阪など大都会にいる人はなんとかなります。しかし地方に住んでいる僕達にとって「薔薇族」がなににましてかけがえのない一つの燈なのです。(…)我々みちのく「竹の子会」では「薔薇族」四周年記念おめでとうとして親睦会を開きたいと思いますので全国からの参加者を募集いたします。全国の皆様ふるって参加して下さいね。(1975.9: 68)

この会には「東北六県、青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島、そして新潟、東京、神奈川、函館、札幌の各諸氏」が70名参加したと報告されている(1975.12: 69)。この後も同様の会として、十周年記念パーティー、十一周年記念パーティが開催されている。二日間開催で食事宿泊込みであったこの会は、地方に住む人にとってのみならず、都市部に住む人にとっても需要のあるイベントであったことが示唆されている。

同様のイベントは、薔薇族によっても開催されていた。(第1回)読者親睦会(1973年11月、静岡県・熱海)、第2回愛読者旅行会(1974年6月29日、長野県・女神湖湖畔)、第3回愛読者旅行会(1974年11月9-11日、長野県・女神湖湖畔)、第4回愛読者旅行会(1975年3月22-23日、石川県・金沢)と、1973年から75年までのあいだに4回開催されていた。

この旅行会が開催されたきっかけは、竹の子会のような読者による集いの盛況に伊藤が触発されたこと(1973.11: 96)であり、それが継続されるようになった

のは、1974年に創刊された競合ゲイ雑誌『アドン』に対抗するためであった。「読者に少しでも出会いの場を提供していきたい、という気持ちも強い支えになっていた」(伊藤 2001: 55)と同時に、その対抗のためにこれまで隔月発行だった薔薇族の月刊化、高校生の座談会開催、第1回読者パーティーの開催、第2回愛読者旅行会の開催、第5回薔薇族電話相談室の開催を宣言したのであった(同上: 54-55)。

またこの旅行会は、伊藤の人脈によっても可能となったものであった。第1回と第3回は、伊藤の中学時代の友人が支配人をしているホテルで開催されている。その支配人から、シーズンオフということで頼まれたという背景もある一方で、友人であったからこそ薔薇族の発行元の第二書房による貸切として利用できたという(1974.9: 33, 146)。「このホテルは二回目。伊藤さんの友人が支配人なので、気をきかして従業員も宴会の準備がすむと引っ込んだきり」(1975.1: 154)と、「一般人」との接触を限りなく無くした上での開催が可能となっていた。参加者数は、第1回は不明のものの、第2回から第4回にかけて、70名、100名、150人と増加していった。また参加者も関東住まいの者のみならず全国から来ていたことが報告されている。こうして開催された愛読者旅行会は、一般の人々との接触を避けて設けられた安全な場の提供であったのだ。

7. 談話室「祭」への注力——真面目な場所

しかし、薔薇族による旅行会はこれらの回を最後に開催がされなくなる。その理由を考察するためには、以降の伊藤が注力するようになる談話室「祭」について考えなければいけない。

伊藤は1976年5月、新宿に談話室「祭」を開店した。その理由は、「あまりの盛況に続行を断念した読者座談会の熱気を忘れることができなかったので、読者の集まれる場所を、もう一度作りたいと考えた」(伊藤 2001: 194)からであるとされている。伊藤は出版元の第二書房の社屋を会場とした座談会を開催もしてきたが、それが大盛況であったことは度々報告されていた。そうした交流の場を新たに作りたいとの思惑のもと、祭は立ち上げられた。

伊藤の語りからもわかるように、祭は必ずしも地元の同性愛者のためだけのものではなかった。たとえば祭への参加者については、「地方から、それこそ遠く北海道や、九州からきてくれた人たち」(1976.8: 154)がいることの報告や、「地方から東京にひるま汽車がついて夜まで、時間のある人も、まっすぐ来られます。」「地方から上京日がきまっている人が、自己PRを書いて送っておいてもらえれば、その日に、理想の人と会うことも可能です」(1976.6: 41)と、全国から参加者を積極的に呼び込もう

ともしていたのだ。

ただ祭は、ゲイバーとは差異化された場所でもあった。たとえば伊藤は、祭にきて欲しい人について次のように語る。

一度も行動を起こさなかった人もぜひきてください。オネエ言葉なんか使ってもらいたくないし、キイキイ、キャア、キャア騒ぐんだったらバアに行ってもらいたいです。そんな人には来てもらいたくない。まじめに話しあいたい人だけが、きてほしいのです。(1976.7: 162)

この語りからは、オネエ言葉といった一種の逸脱や、「騒ぐ」という遊び方を遠ざけ、祭を「まじめ」な人たちの交流の場にしようとする意図が読み取れる。また編者は「なぜ祭がこんなに盛況になったか？」という疑問に対して、「安い料金、明るい雰囲気、今までのホモの世界になかった、社会にも通用する明るいスナックという意図が、うまく時代の要求にマッチしたからでしょう」(1976.11: 38)と評価をしている。実はこうした評価や感想は、愛読者旅行会に対しても与えられていた。第3回の旅行会について、「やはりバーなどで表面的に賑やかに過ごすとは、ぜんぜん別の時間がこの旅の二日間には流れていたのです」(1975.1: 154)と言われている。

つまり伊藤にとっては、彼が考えるゲイバーとは違う、明るい、真面目な交流の場所を作ることが目的であり、それは必ずしも旅行という形態である必要はなかったと考えられる。事実、愛読者旅行会が開催されなくなった時期は祭の開店時期でもあったということからは、旅行の役割を祭が果たすようになっていったと考えることができるだろう。もちろん祭が盛況となったことで旅行企画に手が回らなくなったとも考えられるが、それは反面、旅行を企画しなくても伊藤の思想を実践できていることを暗示している。

では伊藤が完全に旅行の開催などから手を引いていたのかというと、必ずしもそういうわけではない。ゲイバーやハッテン場を目的地とする行動を旅行の一つと捉えるのであれば、それらを紹介する記事は継続して雑誌内に掲載されてきた。そして伊藤自身が旅行を企画するということは少なくとも1970年代にはもう見られないものの、旅行を促進するための記事は掲載してきたのだ。

8. 旅館「千雅」への肩入れ ― エリートさと清潔さ

伊藤の思想と旅行、そして場の形成について考えるとき、もう一つ取り上げたいものがある。それは、伊藤が積極的に雑誌内で取り上げてきた旅館「千雅」である。千雅は東京都渋谷区に1975年3月に開店した「ゲイ・ホ

テル」である(1975.6: 71)。開店時には伊藤自身によって「東京渋谷にゲイ・ホテル誕生」(1975.6: 71)という宣伝記事が掲載され、その後「ノンケ紳士のゲイ・ホテル潜入記！」(1975.11)、「リフレッシュ！男の殿堂“千雅”オープン見聞記」(1979.2)、「渋谷『ホテル・千雅』の新築オープン！！」(1982.10)と、幾度も特集が組まれている。このように特定の施設が複数回薔薇族によって取り上げられるのは稀であった。

ハッテン場、あるいは「淫乱旅館」とも呼ばれるこうした施設は、「待ち合わせをしていない男性同士が部屋を自由に行き来し同衾することが可能な旅館」(石田2015: 122、傍点原文)と定義される。また、「男と男が寝る東京の淫乱旅館は、都民の男たちだけでなく、出張者・旅行者の欲望を満たすかきそめの場所でもあり」(同上: 139)、多くの施設が出張者や旅行者を当てにしていたことは、戦後男性が給与所得者となり休暇が取れるようになるという、日本の経済・就業構造を反映したものであったと言える(石田2014: 74-75)。さらに、70年代には出張や休暇で移動の自由を手にした男性同性愛者が、観光を名目として地方のゲイバーを訪れ、夜はこうしたハッテン場に泊まるという行動パターンができていく(石田2019a)とも指摘される。本節で見たいのは、千雅がどのようなホテルとして取り上げられていたのか、なぜ薔薇族が千雅に肩入れしていたと言えるほど、雑誌内で取り上げられていたのかということである。

まず千雅がどのような旅館として宣伝されていたのかは、薔薇族内に掲載されている広告から見て取れる。

千雅は豪華な雰囲気につつまれ一流紳士と美青年が兄弟のように仲よく語りあい、たのしい一夜をお過ごしになっています。日本中ではもとより世界中のハイクラスの方々が、毎晩大勢お見えになっております。(1978.7: n.pag.)

清潔で、優雅に、浴室も、室内も、踊り場も、スナックも、すべての施設がゆったりとしたムードで完備した、一流紳士の素敵な夜にふさわしい、格調ある旅館です。(1978.12: n.pag.)

いずれの広告文でも、千雅は一流さ、清潔さ、優雅さ、ハイクラスといったイメージで語られている。「ノンケ紳士のゲイ・ホテル潜入記！」(1975.11)という記事では、レポーターが千雅を利用した体験が描かれている。伊藤はそのレポーターに、「青山や六本木に近いでしょう。来る人は上品な人ばかりで、おとなしいんです」と伝えており、千雅のオーナーとレポーターの会話でも、利用客にはヒルトンの客が多いことを共有しながら、千雅を一流の高級ホテルとして捉えようとする姿勢が現れている(1975.11: 20-21)。また千雅の改修を取り上げた

際には、「小さい旅館が生き残るためには、キメのこまかいサービス、家庭的であたたかいサービスを要求されるでしょう。だらしくやっていたら時代に取り残されてしまうというものです」(1979.1: 224-225)とも語られ、いわゆる「おもてなし」の充実も図られている。

清潔でサービスがよく高級な宿泊施設を利用したいというのは男性同性愛者に限らず、人々の一般的な欲求であるものの、男性同性愛者にとってそれは特有の意味づけがされている。先ほどの記事で千雅を利用したレポーターは、『薔薇族』というのは業者の紐付き雑誌ではないのだから、なにも特定の店の提灯持ちをする必要はないはずだ。(…)ホモの世界では権威ある本なのだから、その立場は厳正中立、一社にかたよってはいけないのではないか(1979.2: 36)という疑問を読者が抱くことに触れつつ、千雅が開店した際の伊藤文学による挨拶が紹介されている。

ぼくがこの雑誌を始めた、その根本の目的は、今まで薄汚いところで、まるで虫けらのように世間の目を隠れてこそこそとしていた、その種の人々の行為を、もっと明るい環境の下で堂々とできるようにしたいということでした。(…)多くの人々はまだ、公園の暗がりや公衆便所などで相手を求めあい、時おり巡回の警官の姿が見えると、まるで犯罪者でもあるかのようにパッと、クモの子を散らすようにして逃げ回り、運悪く不審尋問にあって絞られたりしていたものです。(…)私にとって雑誌は一つの公的な発言機関ですから、個人のエコひいきをのせることは許されませんが、本当に清潔な環境、明るい雰囲気をもつて考えて努力している人の店は、これは雑誌の本来の精神的目的とも一致することですから、こうしてわざわざ出席してお祝いを述べるわけでありまして、なにも『薔薇族』が、特定の店に理由もなく肩入れしているわけではありません。(…)暗いきたならしいものだ、と思われていた、この世界のイメージを一日も早く世間からなくし、健全な市民権の得られる愛にするため、みなで努力しているようではありませんか(1979.2: 36-37)

伊藤による以上の語りからは、同性愛者に対する社会のイメージを変え市民権を獲得できるようになるための一助として、清潔さやエリート性と結びついた千雅の宣伝を積極的におこなっていたことがわかる。つまり伊藤にとっては、同性愛者の生活を良くすることは、同性愛者が利用する場のイメージを良くすることでもあり、彼がおこなってきた読者旅行会や祭とのあいだには思想的な連続性があると言えるだろう。

9. 海外旅行——マニラへのセックス／ロマンス・ツーリズム

前節までの旅行は国内旅行であったが、では海外旅行はどのような状況であったのだろうか。1970年代の薔薇族においては海外に関する記事も散在的にみられ、特にアメリカにおける自由さに触れるものがあるが、実際にそこに読者などがどれほど行っていたのかを把握することは難しい。だが、その中でツアーが組まれ団体や個人での旅行が確認できるのがマニラであり、それを企画していたのは千雅であった⁵⁾。

須古(2011)によると、日本では1964年4月に海外観光旅行の自由化がされ、1970年にはジャンボジェット機が登場し旅費が安価になり始めてから第2次海外旅行ブームを巻き起こした。1973年には第1次オイルショックがあったにも拘わらず海外旅行者は増え続け、1979年に第2次オイルショックによって初めて海外旅行者数が前年を下回るまでその数は増え続けた

1978年7月号の薔薇族には、世界中のゲイ・スペースを掲載するガイドブックである『スパルタカス』⁶⁾が初めて紹介されている。「あなたの海外旅行が薔薇色に！！世界中の男町が一目でわかるガイドブック 海外旅行ブームのおり、緊急輸入しました」と記されている。千雅は開店三周年記念として、1978年に薔薇族の読者を4泊5日(4月21~25日)のマニラへの旅へ招待する企画を実施しており、これ以降も定期的にマニラへの旅行の宣伝や優待価格でのツアーの提供をおこなっていた。確認できるだけでも、1978年10月、1978年10月~11月、1979年4月、1981年4月、1982年4月に3泊4日プランが68,000円の優待価格で宣伝されており⁷⁾、回によっては企画が朝日海外旅行社であると明記され、「一流ホテル、航空運賃、毎朝食、市内観光、一流レストランにて晩餐会、ディナーショー」(1979.4: n.pag.)が含まれることが記されていることから、パッケージツアーとして提供されていたことがわかる。

マニラが目的地として選択されていた理由として、この当時の日本人異性愛男性の間で、そこが「買春ツアー」の目的地となっていたことが挙げられる。松井によると、1970年代後半にはマニラが日本の異性愛男性にとっての買春ツアーの本場となっていた(1993: 64-65)。いわゆる、セックス・ツーリズムである。安福によると、「セックス・ツアーは、受けたい性サービスを観光客自身が手配する場合と、それが事前にホテルや代理店などにより手配されるパッケージ型の二つの形態に分類でき」、「これまで、日本人男性観光客の買春行動は、後者の形態をとり、団体で行われることが多いため目立ちやすかった」(1996: 174)と言われており、千雅のツアーもこの傾向に類するものと考えられるだろう。

千雅がマニラツアーを宣伝する数ヶ月前に、薔薇族において「男と男の樂園潜入期 マニラ・セクシーナイト」(1978.1) が掲載されており、その約1年後には「暑い国の狂乱の夜 マニラ・プレイスポット・ガイド」(1979.3) も掲載された⁸⁾。「マニラ・セクシーナイト」においては、マニラへの旅行の社会的背景が語られている。

昔の大人用の読み物の中には、女護ヶ島を描いたものが多い。女は即ち肉体の快樂の対象としか捕えられず、女のいる島というのは、生活とか育児とかすべて無関係に、そこへ行った男に、次から次へとセックスを提供してくれるところという設定になっている。(…)そして、現代。昭和の時代になり、経済大国、ドルの黒字保有国になった日本人たちが、台湾へ、韓国へ、フィリピンへと向かうのは、その女護ヶ島を目指すためである。もちろんその国には、競争する男がいないわけではないが、ただ経済的な面で、日本人と競争できない男が多いため、若い女のほとんどが、僅かの金で日本人の手にはいつてくるのである。男好きの中にはこれを見て、もし女がそのように手にはいるなら、男のほうはもっと簡単に手にはいるのではないか、若いピチピチした男性が、選りどり見どりで、しかも信じられないほどの安値で、いくらでも手に入るのではないかと考える者がいても、不思議はないと思う。そして現実には、そのため各地へ出かけた一部の人々が、ついにそこに男の樂園を発見した。それがフィリピンなのである。(1978.1: 102)

この記述においては、当時の日本人異性愛男性のセックス・ツーリズムについて触れられ、男性同性愛者がそれに上乗せするようにフィリピンを旅行先とし始めたとされている。この点の妥当性に関しては薔薇族だけを資料として検証することは困難だが、少なくともこの記事を書きかけにマニラが旅行先として選択され始めたということは千雅のツアーを見ることでも推測できるだろう。さらに、マニラにおける性的な可能性はこのように紹介されている。

ホテルのボーイでも床屋の小僧でも、極端に言えば道を歩いている若い学生でも、あなたがその気になりさえすれば、すぐにあなたのお相手をする——それがこのフィリピンの現状なのだ。東京の町を歩いても、若いかわいい男の子がほとんど手にはいらなくなって困っているあなたには、これは全く夢のような話か、ホラ話に思えるかもしれない。それが本当の話であり、かわいい男の子を選びほうだい、抱きほうだいの国がちゃんと存在する (1978.1: 102)

つまり、フィリピンという国自体が男性同性愛者にとっての性的樂園のように語られるのである。実際に「マニラ・セクシー・ナイト」を読んだことをきっかけにマニラツアーに参加をした人物は、これまで世界の大都市とゲイ・スポットを訪れた経験を持ちつつ、記事に描かれていたような「マニラのようにオープンな場所」が実際にあるのかについては半信半疑であったと(1989.3: 108)、また別の人物も「『俺はホモです』なんて、日本ではとても言えないことが平気で言えることだけでも素晴らしい解放感が味わえる」(1981.1: 107)と語っている。こうした言説からは、マニラに対する二つのイメージを読み取ることができる。一つは、性的接触が容易な国というイメージ、そしてもうひとつは、公的空間において同性愛へ寛容である国というイメージである。日本においておこなわれてきた男性同性愛者の国内旅行では、目的地となる場合は隔離された「安全な空間」でもあった。一方でマニラについてのイメージは、そのような隔離された空間と異なる。

こうした国において性的接触を楽しむたか志と三彦という二人の人物が「マニラ・セクシーナイト」という記事の登場人物である。この記事自体は三原次郎という筆者がこの二者のマニラ旅行について述べるという体裁のため、半ばフィクションのような内容も見られるが、少なくともここからフィリピンという旅行の目的地がどのような場として形成されているのかを見て取ることができる。

ではこの二人はマニラにおいてどのような旅行をしたのであろうか。この二人は年に2、3回ほどマニラに訪れ、「たか志が、まるで箒のように、一回ごとに違った男を求める、肉体の快樂追求専門なのに対し、三彦は、一人の男をじっくりと愛撫し、肉体よりも精神の愛を大事にするというタイプ」(1978.1: 103)として、異なる嗜好を持った人物であると紹介される。たか志は可能な限り多くの現地の男性との性的接触をするために様々な場に出向く一方、三彦は現地の愛人のホセとの時間をこの3泊4日で過ごす様子が描かれる。

ここから言えるのは、マニラがセックス・ツーリズムとロマンス・ツーリズムの場として描かれているということだ。セックス・ツーリズムはいわゆる買春ツアーで、金銭を伴うセックスを楽しみに他国へ向かう海外旅行であり、主に先進国の男性が発展途上国の女性を買いに行くという権力の不均衡や植民地主義的な関係性が批判されてきた。一方でロマンス・ツーリズムとは、金銭を伴うセックスよりも恋愛関係(romance)や交際(courtship)に重点おいている観光のことであり、主に西洋の女性が発展途上国など経済的に下位の国に訪れ、そこでの男性との交際を楽しむことを意味する言葉として使われ始めた(Pruitt & LaFont 1995)。ただこの両者は明確に区分されるものではなく、複雑に絡み合っている

(Herold, Garcia & DeMoya 2001)。またロマンス・ツーリズムの要点は単に、女性はセックスではなくロマンスに重点を置く傾向があるということではなく、それを通してジェンダー規範を見直したり、アイデンティティの形成がおこなわれたりするという点にある。そのため、「現地の男性は単なる性的なモノではなく、むしろ女性に現地文化を教えてくれる専用ブローカーである」(Pruitt & LaFont 1995: 426)とも言われ、クアアな人々によるサンフランシスコへの旅行を「アイデンティティ・ツーリズム」(Howe 2001)と呼ぶこととの繋がりを見出すこともできる。

「マニラ・プレイスポット・ガイド」で紹介されているマニラツアーでは、その参加者の中に「この道」の「童貞」であり「子だくさん」である「信州の青年」と「四国のお父さん」が参加していたことにも触れられている(1979.3: 110)。この記述から、この二人は女性と結婚しつつも自身の同性への欲望を自覚しており、その欲望を実現するためにマニラツアーへ参加したということが想定される。

以上、ここに見られるセックス／ロマンス・ツーリズムには、国家間の権力関係が反映された性的搾取の構造が存在することを否定することはできない。しかし同時に、このツアー参加者の語りから見えてくるのは、海外に行かなければ自身の性的な欲望を満たすことができないという、国内におけるホモフォビアによってマニラへの旅行へと駆り立てられる社会的な状況である。ここに見て取れるのは、国家間の権力関係、男性ジェンダーの権力性、そして同性愛嫌悪的な社会文化的状況が絡み合う状況である。

10. まとめと考察

以上、本稿では1970年代に焦点を当て、男性同性愛者の旅行について描いてきた。まずこの時期は、男性同性愛者の旅行の黎明期であったと言える。第一に、薔薇族という商業誌の登場によって男性同性愛者向けの情報提供がされるようになったことで、旅行の多様な目的地の存在が知れ渡った。読者同士で情報を共有することによって、移動のネットワークも形成され、さらにそれは、移動を可能とする交通手段の発達によっても実現されていた。

その移動をうながす根底にある動機は、同じ同性愛者との出会い、同性愛者であることを隠さずにいられる場の希求、性的欲望の実現である。そしてそれらの旅行は大きく「クローゼットな旅行」と「アウトな旅行」に分けることができる。各地で開催されていた同性愛者同士の集い、薔薇族による旅行会の開催や「祭」の運営、宣伝される千雅は、男性同性愛者同士の集いを外の世界から切り離し設けられた「安全」な場であった。薔薇族の

伊藤文学の思想では、これらの場はゲイバーなどとは異なる場として捉えられ、真面目さやエリート性などと結びつき、その提供は「市民権」を獲得するための一步でもあった。隔離された空間でイメージの向上をしたとしてもそれは公に知られることはないだろうが、それは、現状として多くの男性同性愛者が自身の性のあり方を公にできないという事実と、それでもイメージの向上の重要性を唱えていた伊藤の間に生じた矛盾であったと言えるかもしれない。一方で、マニラへの海外旅行は「アウトな旅行」であった。マニラと結びついていたイメージとは、特定の分離された空間ではなく、公の場で同性愛者としての振る舞いが可能となる自由な国というものであった。

ただ、男性同性愛者も一枚岩ではない。さらに、1970年代の男性同性愛者について考えるには、彼らの置かれているその時代特有の状況を考慮しなければいけない。そもそも「同性愛者として生きる」というアイデンティティの感覚も大きく異なっている。たとえば、文通を通して知り合った二人の旅行についての体験談は、その点を際立たせる。

二人で何処かへ旅行しようということになり、僕の発案で八丈島へ正月休みを利用して行って来ました。雪国育ちの僕たちにとって、八丈島はまるで外国のようなものでした。二泊三日は短い旅でしたが、とても思い出深い、忘れることのできない旅行となりました。ホテルの人たちに「兄弟ですか」と云われた時は、言葉にいい表せない嬉しさを感じました。(1978.6: 38-39)

現代であれば、同性カップルであると打ち明けることのできない困難としての言説になりうるが、この例ではそうした認識枠組みがまだない。この当時は男性間の親密な関係性を表す時、「恋人・彼氏」という言葉よりも「兄貴・弟」のような男性親族メタファーが使用される傾向があり、その理由として、女性との結婚というモノガミー規範との衝突の回避が指摘されている(前川 2021)。1970年代当時は現在と比べて、同性愛者であると自覚しながら女性と結婚している人が多かったことが指摘されており(前川 2017)、本稿が扱った記事においても女性と結婚している人物の語りが登場する。マニラへのツアーに参加した人物の中にも、女性と結婚している「子だくさん」の人らがいたことを思い出したい。この当時の男性同性愛者の多層性を考えるのであれば、女性と結婚しているか否かという点を検討すべきだろう。

金銭や時間の点を除けば、結婚していない男性同性愛者にとって個人旅行をすることの制約は弱かったと言えるだろう。しかし、女性と結婚をしている人にとっては、妻に対して何かしらの言い訳が必要になる。薔薇族によ

る読者旅行会に参加した人物は「家族があつてこうして出てくるのは、容易なことではないですね」(1974.9: 36)と、また別の人物は「今夜は選挙の応援演説に行くといつて出てきました」(1974.9: 35)と語っている。ただこれ以外に実際にどのような言い訳がされてきたのか、特に遠出となるマニラへの旅行においてはどうだったのかは想像の範囲でしか検討ができないが、しかし当時のジェンダー秩序や旅行形態から想定される可能性について、以下のように言うことができるのではないだろうか。

山村(2011)は高度経済成長期(1955～1973年)には労働の活力のための余暇としての職場旅行が隆盛したことを指摘している。70年代末にはその割合も減少し家族旅行などに取って代わられていくが、団体としてのマニラへのセックスツアーがそれでも実施されていたことから(松井1993、安福1996)、職場旅行が全くなかったわけではなかっただろう。またこの高度経済成長期は、男は働き女は主婦となる核家族が当たり前とされるようになった時期でもあった(落合2019)。このようなジェンダーの状況においては、出張以外で職場の人との慰安旅行に行くということ、そしてそれが海外であればマニラであるという説明が、比較的ハードルの低い言い訳として利用できたのではないだろうか。

地元や現在の居住地を遠く離れるための旅行、あるいは旅行という名の自由をより必要としていたのは、日常の行動が妻や親族に知られることをより心配していただろう、女性と結婚をしている男性同性愛者であったと言える。そして彼らは、結婚をしていない男性同性愛者よりもずっと、男性として許容される言い訳に頼ってきたのではないだろうか。

11. おわりに

最後に、現在のLGBTQツーリズムとの結びつきから簡単な考察をしたい。本稿で十分に考察ができなかったのが、ジェンダー以外の属性との関わりから男性同性愛者の旅行について検討することである。

たとえば、年齢という属性との関わりである。薔薇族においては高校生など若者からの投稿や、「チビバラ」と呼ばれる彼ら専用の交流欄などもあった。そこにおいて、山梨に住む16歳の人物が、「だいたい、ずるいんだよね。大人の人たちの集まる場所はいっぱいあるのに、中学生や高校生を対象にしたところなんてないんだものね。東京の奴らは『祭』があるからまだいいんだけどさ、地方ばくたちはどうなるの伊藤さん」と投稿し、それに対して伊藤が「チビバラだって、仲間を作りたい、それは当然のことなんだけど。高校生はなんといつても勉強第一で、勉強をまず最初に考える。愛情の問題はその次だな。ガマン、ガマン」(1977.8: 87)というとき、子どもらの移動能力などは無視され、旅行は大人の特権とさ

れてしまう。また視覚障害のある人物が、迷惑をかけることを心配し3年間考えた後に飛行機に乗ってハッテン場に来、「涙こぼして喜んで」、その後お礼にワラビを持ってきたというエピソード(1979.11: 122-123)などは、障害と旅行というテーマからの考察を促すものである。

本稿が扱った1970年代という時代の男性同性愛者のあいだには、さまざまな属性との関わりを加味しても、一つの層として旅行に関して共通のニーズがあったと言えることはできるように思われる。「LGBTQ ツーリズム」という言葉の特徴の一つは性的アイデンティティを軸にした観光であり、LGBTQ という一つの集団を一枚岩的に考える傾向と切り離すことが難しいということでもある。LGBTQ を一枚岩的に考えて特定の目的地に誘致することは効果的ではない(Hattingh 2021: 83)との指摘がされるとき、現代において「LGBT ツーリズム」なるものがどれほど成り立ち、どれほど効果をもたらすのか、そもそも何の目的のために実施するものなのかということは、常に再考に値する。特に出会いの機会が過去と比べて無数にある現代のゲイ男性にとって、また同性婚についての議論が隆盛している現在において、LGBTQ をターゲットとした旅行企画の持つ意味とは一体なんなのだろうか。日本におけるLGBTQ ツーリズムの研究がまだ全く存在しない状況において、本稿が今後の議論を促すきっかけとなることを期待する。

註

- 1) 「LGBT ツーリズム」や「ゲイ・ツーリズム」と呼ばれることもあるが、本稿では「LGBTQ ツーリズム」に統一し、すべて同義として使用する。
- 2) 薔薇族を含め、他のゲイ雑誌に関する詳細は石田(2018)参照。
- 3) 薔薇族から記事を引用する際には、その出典として引用箇所に「年.号: 頁」を記す。また1970年代の資料という性質上、現在では不適切とされる「ホモ」という言葉が登場するが、時代背景に鑑みそのまま引用する。
- 4) ハッテン場とは、見知らぬ男性同士が性交渉を成立させるために利用する場のことであり、そのため専用に営業される「専用ハッテン場」と、公園、公衆トイレ、映画館などのような「流用ハッテン場」がある(石田2019b)。
- 5) 一度伊藤によってアメリカ西海岸の旅(1976年2月6-15日)が企画されたが、雑誌編集の手伝い人が辞めてしまい雑誌発行に困難が生じたという理由で中止になっている(1976.3: 162)。
- 6) 『スパルタカス』とは、1968年にイギリスのブライトンで設立された会社スパルタカスから、1970年に発行され始めた旅行ガイドブックである。正確に網羅するのが困難という点でアメリカとカナダを除き、世界中の国におけるゲイ・スペースを掲載している(Ewing 2017)。
- 7) 厚生労働省の「賃金構造基本統計調査」によると、1978年の男性の初任給は大学卒で105,500円、高卒で85,900円である。

8) 1970年代後半の西ドイツとヨーロッパにおいても、男性同性愛者向けの情報誌がフィリピンをセックス・ツアーの目的とした取り上げ始めたことが指摘されている(Ewing 2023: 33).

付記

本稿は、札幌国際大学令和4年度奨励研究費(個人研究)の助成を受けている。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- 遠藤英樹(2017)『ツーリズム・モビリティーズ：観光と移動の社会理論』ミネルヴァ書房。
- Ewing, C (2017) "Translating Sex: 'Spartacus' and the Gay Traveler in the 1970s," *History of Knowledge*. (<https://historyofknowledge.net/2017/04/10/translating-sex-spartacus-and-the-gay-traveler-in-the-1970s/#more-2938> : 2023年12月22日閲覧)
- Ewing, C (2023) "Defining Sex Tourism: International Advocacy, German Law, and Gay Activism at the End of the Twentieth Century," *Journal of the History of Sexuality*, 32(1): 27-55.
- 復興庁(2018)「[記者発表資料] 観光先進地を目指し、オールジャパンで観光復興「新しい東北」交流拡大モデル事業 平成30年度事業(広域型)選定結果等」(<https://www.reconstruction.go.jp/topics/ml18/04/2018kouryuukakudai/moderujigyokoukigatasenteikekka.pdf> : 2023年12月22日閲覧)
- 橋本和也(2019)「観光とは何か：オルタナティブの試みをもみ込む大衆観光」遠藤英樹・橋本和也・神田孝治編『現代観光学：ツーリズムから「いま」がみえる』新曜社：18-31.
- Hattingh, C (2021) "Understanding African LGBT Traveler Motivations: A Non-Westernized Perspective," in Oscar Vorobjovas-Pinta (ed.), *Gay Tourism: New Perspectives* (pp.67-88). Channel View Publications.
- Herold, E., Garcia, R., & DeMoya, T (2001) "Female Tourists and Beach Boys: Romance or Sex Tourism?," *Annals of Tourism Research*. 28(4): 978-997.
- Howe, A. C (2001) "Queer Pilgrimage: The San Francisco Homeland and Identity Tourism," *Cultural Anthropology*, 16(1): 35-61.
- 石田仁(2014)「全国にあった70・80年代の同性愛者向け宿泊施設」『薔薇窗』(25): 43-76.
- 石田仁(2015)「いわゆる淫乱旅館について」井上章一・三橋順子編『性欲の研究：東京のエロ地理編』平凡社：122-141.
- 石田仁(2018)「ゲイ雑誌、その成り立ちと国立国会図書館の所蔵状況」『現代の図書館』56(4): 196-204.
- 石田仁(2019a)「安全な自由：ハッテン場に夢を託した時代における」北海道大学大学院文学研究科 応用倫理・応用哲学研究教育センター編『公開シンポジウム「『LGBT』はどうつながってきたのか?」記録』：23-31.
- 石田仁(2019b)「ハッテン場」綾部六郎・池田弘乃編『クィアと法：性規範の解放／開放のために』日本評論社：75-110.
- 伊藤文学(2001)『編集長「秘話」』文春ネスコ。
- JTB 総合研究所(2018)「2018年は日本でのLGBT ツーリズム元年となるか?」(<https://www.tourism.jp/tourism-database/viewpoint/2018/08/lgbt-friendly-country/> : 2023年12月22日閲覧)
- JTB 総合研究所(2023)「LGBT ツーリズム」(<https://www.tourism.jp/tourism-database/glossary/lgbt/> : 2023年12月22日閲覧)
- KATHYS (n.d.)「管理者 PROFILE & ご挨拶」『大人の修学旅行』(https://otonashugaku.themedia.jp/pages/1271123/page_201707081430 : 2023年12月22日閲覧)
- 前川直哉(2017)『〈男性同性愛者〉の社会史：アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』作品社。
- 前川直哉(2021)「ゲイ男性と結婚・恋愛・家族：『二十才の微熱』と『ハッシュ!』を男性同性愛の歴史に位置づける」菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』晃洋書房：93-107.
- Markwell, K (1998) "Playing Queer: Leisure in the Lives of Gay Men," in David Rowe & Geoffrey Lawrence (eds.), *Tourism, Leisure, Sport: Critical Perspective* (pp.112-123). Hodder Education.
- Markwell, K (2021) "Forward," in Oscar Vorobjovas-Pinta (ed.), *Gay Tourism: New Perspectives* (pp. xiii-xvi). Channel View Publications.
- 眞崎裕史(2020)「沖縄で進む『LGBT 理解』, 仕掛け人が貫く信念：主導する2人のホテル経営者の思いとは」『東洋経済ONLINE』(<https://toyokeizai.net/articles/-/393286> : 2023年12月22日閲覧)
- 松井やよい(1993)『アジアの観光開発と日本』新幹社。
- 中嶋真美(2022)「イノベーション普及理論からみる日本におけるLGBT ツーリズムの浸透」『日本国際観光学会論文集』(29): 25-33.
- 落合恵美子(2019)『21世紀家族へ：家族の戦後体制の見かた・超えかた [第4版]』有斐閣。
- Ooi, C (2021) "Gay Tourism: A Celebration and Appropriation of Queer Difference," in Oscar Vorobjovas-Pinta (ed.), *Gay Tourism: New Perspectives* (pp.15-33). Channel View Publications.
- Out Asia Trave (n.d.)「Rainbow Ski Weekend in Urabandai」(<https://www.urabandairainbow.com> : 2023年12月22日閲覧)
- Pruitt, D & LaFont, S (1995) "For Love and Money: Romance Tourism in Jamaica," *Annals of Tourism Research*. 22(2): 422-440.
- Puar, J (2002) "A Transnational Feminist Critique of Queer Tourism," *Antipode*, 34(5): 935-946.
- Shahani, N (2020) "Safe in the City: Gay Tourism and the Politics of Worlding," in AISRD (ed.), *Theorizing Gender and Race in Historical Contexts: Invisibilities, Transboundary Imagination, and Post-Colonial Futures beyond 'the Veil'* (pp.14-27). (=2021, 箕輪理美訳「都市での安全：インドにおけるゲイ向け観光と世界化のポリティクス」荒木和華子・福本圭介編『帝国のヴェール：人種・ジェンダー・ポストコロニアリズムから解く世界』明石書店：171-196)
- 杉浦郁子・前川直哉(2022)『「地方」と性的マイノリティ：東

- 北 6 県のインタビューから』青弓社.
- 須古正恒 (2011) 「旅行形態から見た戦後日本の海外旅行変遷について：1945 年から 1995 年まで」『旅の文化研究所研究報告』(20)：85-102.
- 須崎成二 (2019) 「『新宿二丁目』地区におけるゲイ男性の場所イメージとその変化」『地理学評論』92(2)：72-87.
- UNWTO (2017) *Second Global Report on LGBT Tourism: Affiliate Members Global Reports, Volume fifteen*. UNWTO.
- Usai, R., Cai, W., & Wassler, P (2022) "A Queer Perspective on Heteronormativity for LGBT Travelers," *Journal of Travel Research*. 61(1): 3-15.
- Vorobjovas-Pinta, O (2021) "Gay Tourism: New Perspectives," in Oscar Vorobjovas-Pinta (ed.), *Gay Tourism: New Perspectives* (pp. 1-12). Channel View Publications.
- 山村高淑 (2011) 「日本における戦後高度経済成長期の団体旅行に関する一考察：『職場旅行』隆盛化の実態とその背景について」『旅の文化研究所研究報告』(20)：9-24.
- 安福恵美子 (1996) 「観光と売買春：東南アジアを中心に」石森秀三編『観光の二〇世紀』ドメス出版：173-191.
- 安村克己 (2011) 「マス・ツーリズムの出現とその弊害」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房：20-23.